

厚生科学研究費補助金
特別研究事業

社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究

平成12年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 吉 川 武 彦

平成13年（2001）年 3 月

厚生科学研究費補助金（特別研究事業）

社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究

平成12年度 総括・分担研究報告書

平成13年 3月

- 主任研究者 吉川 武彦（国立精神・神経センター精神保健研究所名誉所長）
- 分担研究者 西園 昌久（心理社会的精神医学研究所所長/福岡大学名誉教授）
- 中島 豊爾（岡山県立岡山病院院長）
- 高橋 紳吾（東邦大学医学部精神神経医学講座助教授）
- 高塚 雄介（早稲田大学総合健康教育センター心理専門相談員・臨床心理士）
- 児玉 隆治（東京学芸大学教授・同保健管理センター所長）
- 伊藤順一郎（国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰相談部長）
- 荒田 寛（国立精神・神経センター精神保健研究所社会精神保健部室長）
- 川野 健治（国立精神・神経センター精神保健研究所成人精神保健部室長）
- 研究協力者 野口 博文（国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰相談部
流動研究員）

目 次

I. 総括研究報告書

- 社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究・・・・・・・・・・ 1
吉川 武彦

II. 分担研究報告書

1. 社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究・・・・・・・・・・ 7
西園 昌久
2. 社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究・・・・・・・・・・ 15
中島 豊爾
3. 社会的問題を起こす新たな社会病理に関する研究・・・・・・・・・・ 19
高橋 紳吾
4. 青少年における「ひきこもり」の心理と「切れる」心理
に関する考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
高塚 雄介
5. 人間関係スキルを開発する心理教育の研究・・・・・・・・・・ 63
児玉 隆治
6. 「カルト集団」に関する問題をもつ人々に対する公的機関の援助の実態に
ついての調査研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
伊藤 順一郎
荒田 寛
川野 健治
野口 博文（研究協力者）
（資料）「カルト集団」に関する問題をもつ人々に対する公的機関の援助
の実態調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84

総括研究報告

厚生科学研究費補助金（特別研究事業）

総括研究報告書

社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究

研究組織

総括研究者	吉川 武彦	国立精神・神経センター精神保健研究所	名誉所長
分担研究者	西園 昌久	心理社会的精神医学研究所	所長
	中島 豊爾	岡山県立岡山病院	院長
	高橋 紳吾	東邦大学医学部精神医学講座	助教授
	高塚 雄介	早稲田大学総合健康教育センター	心理専門相談員
	児玉 隆治	東京学芸大学保健管理センター	教授
	伊藤順一郎	国立精神・神経センター精神保健研究所	部長
	荒田 寛	国立精神・神経センター精神保健研究所	室長
	川野 健治	国立精神・神経センター精神保健研究所	室長

「社会的問題行動を起こす新たな精神病理」の解明を試みた。その結果、社会を震撼させる青少年犯罪に通底する精神構造とオウム真理教等の特定集団に入信する青少年の精神構造とに通底すると考えられる「新たな精神病理」を明らかにすることができた。問題を深く解明するためにはこの種の研究がさらに進められる必要があることを指摘した。具体的には、いわば定点観測的な研究が重要であり、その実現のためにも省庁横断的な研究体制を組むことが重要であることを指摘した。

A. 研究目的

「引きこもり」は社会からの撤退（with drawal）を意味するが、本来これは自我防衛の機制であり従来の精神医学で言う精神病理とは言えない。しかしながら多様化する価値観や状況の変転する現代社会にあって、直面した状況において適切な判断ができないままに社会から撤退をしているという意味では、今日的現象としてみられる「引きこもり」は新たな社会病理現象でもあるが、これらの社会現象には現代社会におけるこころの育ちに関わる『新たな精神病理』があると考えられることもできよう。

このような新たな精神病理に深く関係すると思われる社会的問題行動や社会病理現象はここに挙げた「引きこもり」のみならず、いわゆる「いじめ」や「家庭内暴力」あるいは「校内暴力」などを挙げることもできる。このような状況下において、非行意識や犯罪意識も薄い「有機溶剤乱用」や「覚醒剤乱用」などの社会病理現象が広がるほか、いわゆる「17歳問題」として取り上げられた「少年犯罪」は増加の傾向が見られる。その一方で、オウム真理教等の特定集団に入信する青少年たちも増加の傾向にあると見ることができる。

本研究では、社会を震撼させる青少年犯罪に通底する精神構造とオウム真理教等の特定集団に入信する青少年の精神構造とに通底すると考えられる「新たな精神病理」を明らかにすることによってこれらの社会病理現象の解明に寄与し、国民の精神的健康の保持及び増進を図るとともに精神保健福祉行政の一層の推進を図ろうとするものである。

B. 研究方法

これらの青少年犯罪に共通する精神構造をとらえるとともに特定集団の信者あるいは元信者に共通する精神構造をとらえることによって、社会病理現象ともいえるこれらの事象に通底する精神構造を「新たな精神病理」としてとらえようとした。このような社会病理現象が全体的に拡大する傾向にあるほか個々の社会病理現象が増加の傾向にあるが、これらの社会病理現象を個々の事象の集積としてとらえるとそこには個人の精神的健康の障害の存在を推定することができる。これらの精神的健康の障害には現代社会における人間関係が深く関与していると推定され、それは人間関係の希薄化をもたらしたと考えられる。本研究では、これらの精神的健康の障害を従来からの疾病概念とは異なった考えでくくることとし、これを「新たな精神病理」としてとらえることとした。

研究は、多発するこれらの社会病理現象に通底すると考えられる「新たな精神病理」をマクロな視点でとらえるとともに、具体的な問題を解明することによってこれらの「新たな精神病理」をミクロな視点からとらえて研究を進めた。マクロな視点からは、社会的問題行動を起こす「新たな精神病理」として一括してとらえる総括的研究を行うとともに、人間関係スキルを開発する心理教育の研究を実践している活動を

解析することによって行うこととした。

一方、ミクロな視点からは大きく分けて2方向から行った。その1は、社会的問題行動を起こす「新たな精神病理」を青少年の精神発達と精神構造の面から解明しようとするもので、問題の背景に潜む青少年心理を解明することによって現代青少年がもつ特異性を明らかにしようとするとともに、動機がわかりにくい青少年犯罪を種々の角度から検討を行い精神医学的にどのような対応が望まれるかを検討した。

その2は、オウム真理教等の特定集団への入信過程と離脱過程の研究を事例検討を通じて「心理操作」と「自己責任」の視点から行うほか離脱過程についての研究を行い「新たな精神病理」との関係を明らかにするとともに、諸外国における実状についてこれらの現象にどのように対処しているのかを明らかにした。さらにこれら特定集団と関わりをもつ人々で援助を求めてくるものに対する公的援助の実態に関する調査を行うことによって、わが国におけるこのたぐいの実態を明らかにするとともに、これらのいわゆるカルト集団に関わりをもつ人々に対する公的機関の援助がどのような実態にあるのかを調査した。

C. 研究結果

マクロな視点から行った総括的な研究（分担研究者：西園昌久）では、ここでいう「新しい精神病理」に共通する特徴として、個別的な心性としては「引きこもり」に内在する攻撃性や同一性障害をとらえて現実生活体験の乏しさを抜き出した。また社会的な視点からは近代化過程における精神病理としてこれをとらえるとともに、わが国における伝統的コミュニティの崩壊と子育ての変化を挙げた。個別的な問題としては人格発達への影響が見られることとコミュニケーション障害を取り上げた。さら

に対策的な視点として個人精神療法や集団精神療法などを含めた精神医学的対応の必要性を示唆し、またSSTや健康教育の重要性についても考察を進めた。

人間関係スキルを開発する心理教育の研究（分担研究者：児玉隆治）では、非社会的・反社会的な問題行動を起こす青少年に通底する心理発達のな問題として人間関係の希薄化が指摘されてきたが、健康的・適応的な生活を送っていると見られる多くの青少年においてもソーシャル・スキルの未熟性が見られることから、健全な心理発達をうながすためにも学校教育や地域社会は青少年が「群れる」体験を積める場を提供する必要があることが指摘された。さらにその実践を通して人間関係のスキルを開発してソーシャル・スキルを育てることの効用について論じた。

ミクロな視点から行った研究では、青少年の「引きこもり」や「切れる（キレる）」状態を解明する（分担研究者：高塚雄介）ことから「新たな精神病理」を明らかにしようとした。ここでは教育相談や学生相談あるいは病院の臨床を通じて心理臨床の現場において体験する「引きこもり」と「切れる」心理の解明にあたった。これによれば、「引きこもり」と「切れる」心理は表裏をなすもので、両者に共通するのは対人関係の困難さであるという指摘がされた。対人関係の困難さがもたらされた理由を仮説的に、①自立を迫る社会の落とし穴、②信頼感を前提とする対人関係のもろさ、③「母性」的関わり喪失と感受性の減弱、④ギャング・エイジの消失、⑤競争原理の強化が挙げられた。

また、ここ数年に見られる少年による特異的で動機がわかりにくい犯罪を入手可能な情報をもとに分析し可能な範囲で発達の観点から検討を行った（分担研究者：中島豊爾）。その結果、これらの少年が起こ

す社会的問題行動の背景にアスペルガー症候群を含む高機能広汎性発達障害の存在を推定した。高機能広汎性発達障害の少年たちの多くは凶悪な事件とは無縁であり、むしろきまじめすぎるほど過剰に適応しているものが多い。しかしながら一方では「切れる（キレる）」と限度を知らず、凶悪な犯罪につながる行為を示す少年もおり、発達の観点からは注意欠陥多動性障害との関連も考慮しないわけにはいかないことを推定した。衝動性亢進と満たされない愛着欲求との間で不安緊張と葛藤状況のなかで育つ彼らが、反抗挑戦性障害から行為障害へさらに反社会性人格障害へと発展していく破壊性行動マーチ（DBDマーチとも呼ばれ）をたどることも少なくないものと考えた。

いわゆるカルト集団に関する研究を通じて社会的問題行動を起こす「新たな精神病理」を明らかにしようとした（分担研究者：高橋伸吾）。カルト関連問題に共通する個人心理に関することとして心理操作と自己責任についての考察を行い、それらに基づいてこうした議論の多い集団になぜ若者たちが引きつけられていくのかそのメカニズムを調査し、さらにこうした集団から離脱していく過程を当該集団のもとメンバーたちの面接を通じて解明した。その結果、犯罪行為にまでいたったケースとそうでないケースとの差異は心理操作という点では僅少なものでありさらに精神病理学的な検討が重要であることが指摘された。

これらの集団から離脱する過程を明らかにするために面接調査をしたが、調査協力を得られたのは276人であった。面接調査にあたったものは大学教員、弁護士、教諭、臨床心理士、宗教者など12人である。この中で自然脱会したものはわずかに47人であり、あとは説得されて脱会したものであった。主な説得者は肉親であるがその

肉親に関わったものは多様である。元メンバーなどが直接関わりDeprogrammingの手法によって脱会にいたったケースは少ない。こうしていったんは脱会したものの、そのあと専門家や元メンバーによってこちらのケアを受けているものは276人のうち245人であり極めて多数であることも明らかにされた。

また、いわゆるカルト集団に関する問題をもつ人々に対する公的機関の援助の実態（分担研究者：伊藤順一郎、荒田寛、川野健治）を明らかにする目的で、関連すると考えられる公的機関2229カ所にアンケート調査を行った。調査期間内に回収し得た有効票は1159票（52%）であり、この中で平成11年以降にこれらカルト集団に関係する問題の相談事例をもった機関は73機関、132件、133人であった。相談者は家族がが多く、本人がそれに続いている。また他機関からの相談もあることがわかった。内容的には、マインドコントロールなどの「心理的動揺」に関するものをはじめ「経済的問題」や「対人関係の問題」などが多く見られた。行われている支援については「他機関への紹介」がもっとも多く、「家族支援・家族療法」がこれに続いている。他機関への紹介では「精神科医療機関」と「警察」が多かった。援助に関するニーズは多様であり、心理社会的サポートに加えて機関間連携による多様なサービス展開が求められていることが明らかになった。

これらの研究結果から、次のように考察をすすめた。

社会的問題行動を起こす青少年が増加傾向にあるが、これら青少年が示す特異な行動を解明することから通底すると考えられる「新しい精神病理」の存在を浮かび上がらせることに成功した。これらの「新しい精神病理」は、わが国における伝統的コミ

ュニティの崩壊と子育ての変化に起因すると考えられるものであり、人格発達への影響を見ることができるとともにコミュニケーション障害があることが指摘できる。こうした「新しい精神病理」は、犯罪行為等の激しい社会的問題行動をとまなうものばかりでなく、健康的・適応的な生活を送っていると見られる多くの青少年においてもソーシャル・スキルの未熟性として見られることがあることも指摘されよう。本研究の主任研究者である吉川は、かねてからこれらを総合的に指摘してきたところでもある。

青少年の「引きこもり」や「切れる（キレる）」状態が「新たな精神病理」と深い関係にあることも明らかにされたが、「引きこもり」と「切れる」心理が互いに表裏をなすものであるという指摘は重要である。

この両者に共通するのは対人関係の困難さであろうが、これに関してもこれまで「対人関係の発達には順序性があり、その順序を踏まない子育てや学校教育の在り方の問題がある」と吉川は指摘してきた。いわゆる「17歳問題」をはじめとする動機がわかりにくい青少年犯罪の分析から、これら青少年が起こす社会的問題行動の背景にアスペルガー症候群を含む高機能広汎性発達障害の存在を推定し、発達の観点からは注意欠陥多動性障害との関連も考慮しないわけにはいかないことを推定したことも重要である。この問題に関してはさらに検討を進める必要がある。

一方、いわゆるカルト集団に関する研究の結果指摘された問題として、犯罪行為にまでいたったケースとそうでないケースとの差異は心理操作という点では僅少なものでありさらに精神病理学的な検討が重要であることを指摘したほか、離脱者の面接調査の結果では自然脱会したものは極めてわずかであり、あとは説得されて脱会したも

のであったことが判明した。その主な説得者は肉親であったが、脱会後も専門家や元メンバーによってこころのケアを受けているものが大多数であったことは「新たな精神病理」がわが国における伝統的コミュニティの崩壊と子育ての変化に起因する人格発達の未熟さとコミュニケーション障害に深い関わりがあることが指摘できる。こうした「新しい精神病理」は、カルト集団へ引かれていくという青年たちが示す行動と、一般の青年たちのソーシャル・スキルの未熟性とを重ね合わせてさらに検討する必要があるだろう。

平成11年度厚生科学研究事業特別研究報告書「特定集団から離れたものに対する保健指導のあり方に関する研究」（主任研究者：吉川武彦）でも、いわゆるカルト等の特定集団からの離脱や離脱を試みようとしているものに対して公的機関が果たすべき役割は大きいことを指摘した。本研究ではこれらの研究結果を踏まえてこれらカルト等の特定集団に関係する問題に公的機関がどのように関わっているかを調査した。相談事例は多いとは言えなかったが、今回の調査からは相談者は家族が多く続いて本人からの相談が多いことがわかったほか、他機関からの照会もかなりあることが判明した。相談内容は「心理的動揺」「経済的問題」や「対人関係の問題」などであるが、支援内容は「他機関への紹介」がもっとも多く「家族支援・家族療法」がこれに続いていた。他機関への紹介では「精神科医療機関」と「警察」が多かったが、本研究の分担研究者である高橋も指摘しているように、援助に関するニーズは多様でありこれからは機関間連携による多様なサービス展開が求められている。その点に関しては平成11年度研究において伊藤が詳細に述べている。

社会を震撼させる青少年犯罪に通底する

精神構造と、オウム真理教等の特定集団に入信する青少年の精神構造とに通底すると考えられる「新たな精神病理」を明らかにすることによってこれらの社会病理現象の解明に寄与し、国民の精神的健康の保持及び増進を図るとともに精神保健福祉行政のいっそうの推進を図ろうとする目的で本研究を行ったが、明らかにされた「新しい精神病理」に基づく社会的問題行動をさらに検討するためにも今後のこの種の研究がさらに進められる必要があることがわかった。

研究としては問題発生を始点として研究を開始するのではなく、いわば定点観測的にも青少年の精神構造の変化を迫る必要がある。これによって「引きこもり」「いじめ」「家庭内暴力」「校内暴力」などの背景にある『新しい精神病理』をモニターすることができよう。その結果、「有機溶剤乱用」や「覚醒剤乱用」などの社会病理現象が広がりやを予防し、またいわゆる「17歳問題」や「少年犯罪」の拡大を予防することもできると考える。さらには、オウム真理教等のいわゆるカルト特定集団問題の増加をくい止めることができると考える。そのためには、省庁横断的な研究体制を組むことが重要であり、さらに定点観測的な意味を込めて腰を落ち着けた研究体制を組む必要がある。

D. 結論

「社会的問題行動を起こす新たな精神病理」の解明を試みた。これらの事象に通底する精神構造を「新たな精神病理」としてとらえる必要があり、さらにこれらの精神的健康の障害には現代社会における人間関係が深く関与していると推定され、またさらにそれらは人間関係の希薄化がもたらしたと考えられたからである。

マクロな視点からは、「新しい精神病理」に共通する特徴として個別的な心性と

しては「引きこもり」に内在する攻撃性や同一性障害をとらえ、現実生活体験の乏しさを抜き出し近代化過程における精神病理としてこれをとらえた。ミクロな視点からは総説的に青少年の「引きこもり」や「切れる（キレる）」状態を明らかにし、「引きこもり」と「切れる」心理は表裏をなすもので両者に共通するのは対人関係の困難さであると指摘した。

また、いわゆる「17歳問題」をはじめとする動機がわかりにくい青少年犯罪の分析からは、これら青少年が起こす社会的問題行動の背景にアスペルガー症候群を含む高機能広汎性発達障害の存在を推定し、発達の観点からは注意欠陥多動性障害との関連も考慮しないわけにはいかないことを推定したほか、いわゆるカルト集団に関する問題からは、集団から離脱していく過程を当該集団の元メンバーたちの面接を通じて解明した。その結果、犯罪行為にまでいたったケースとそうでないケースとの差異は心理操作という点では僅少なものでありさらに精神病理学的な検討が重要であることを指摘した。

離脱者の面接調査からは自然脱会者は僅少であり、専門家の関与が重要であることを指摘した。脱会後も専門家や元メンバーによってこころのケアを受けているものが多いことも指摘した。また公的機関の調査からは、相談事例をもった機関は少ないが、内容的には「心理的動揺」「経済的問題」「対人関係の問題」などが多く見られ、行われている支援は「他機関への紹介」がもっとも多く「家族支援・家族療法」がこれ

に続いていることが明らかになった。他機関への紹介では「精神科医療機関」と「警察」が多かった。援助に関するニーズは多様であり、心理社会的サポートに加えて機関間連携による多様なサービス展開が求められていることが明らかになった。

これらの結果、社会を震撼させる青少年犯罪に通底する精神構造とオウム真理教等の特定集団に入信する青少年の精神構造とに通底すると考えられる「新たな精神病理」を明らかにすることができた。問題を深く解明するためにはこの種の研究がさらに進められる必要があることを指摘した。具体的には、いわば定点観測的な研究が重要であることを指摘し、このためにも省庁横断的な研究体制を組むことが重要であり腰を落着けた研究体制を組む必要があることを指摘した。

参考文献

1. 平成11年度厚生科学研究特別研究報告書「特定集団から離れたものに対する保健指導のあり方に関する研究」（主任研究者：吉川武彦）
2. 平成12年度三省庁合同研究報告書「三省庁研究報告書」（主任研究者：吉川武彦）
3. 吉川武彦：いま、こころの育ちが危ない。毎日新聞社、1998
4. 吉川武彦：人はなぜ心を病むのか。太陽企画出版、1998
5. 吉川武彦・竹島正（編著）：これからの精神保健。南山堂、2001年

分担研究報告

厚生科学研究費補助金（特別研究事業）
分担研究報告書

社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究

分担研究者 西園昌久（心理社会的精神医学研究所 所長）

研究要旨：特定カルト集団信奉者と最近頻発する暴力あるいは少年による殺傷事件を起こした者を社会的問題行動を起こす新たな精神病理として一括する視点で次の検討を行った。

1. それら精神病理の共通的特徴として
 - (1) ひきこもり一内に潜んだ攻撃性
 - (2) 暴力への傾向一外に向いた攻撃性
 - (3) 人格発達ことに思春期心性の歪曲
 - (4) 仲間・集団との関係の異常
2. 同一性障害としての理解
 - (1) 自己評価の挫折／心的閉塞感
 - (2) 被害感情
 - (3) 幻想優位のいつわりの自己、あるいは癒し
 - (4) 現実生活体験の乏しさ
3. 我が国社会の変化との関連
 - (1) 近代化過程とそれに関連する精神病理
 - (2) わが国の伝統的コミュニティの崩壊と子育ての変化一人格発達への影響
 - (3) コミュニケーション障害
4. 新たな精神病理に対する予防と治療的対応についての精神医学的並びに精神分析的立場からの対応
 - (1) 個人療法と集団療法
 - (2) 精神医学的対応
 - (3) S S T
 - (4) 健康教育

A 研究目的

昨年、私どもは厚生科学研究費（特別研究事業）：特定集団から離れた者に対する保健指導のあり方に関する研究を行った。その中で分担研究を行ったがそれは特定集団におけるいわゆるマインド・コントロールの内容とそれが成り立つ条件を精神医学的、精神分析的立場から明らかにし、さらにその上で治療的介入の可能性と方向とを模索することであった。ところが、その後、青少年による世の中の人びとの理解をこえる動機の判然としない殺傷事件が相つぎ、その精神医学的解明が求められる事態が生じた。この一見、現象的には無関係と思われる2つの病理の周辺には、通り魔事件のある種のものや、ひきこもりから一転しての暴力、さらには未熟で自己愛的な人格発達障害による暴力なども数多く発生している。これらを一括して社会的問題行動を起こす新たな精神病理と想定して、それらを今日の社会病理ないしは社会的基盤と関連させて個人の病理を理解しその予防と治療の方向性と可能性を明らかにすることをこの研究の目的とした。

B 研究方法

この研究班での討議内容、図書、学術発表、ならびに新聞あるいはTVなどによる

情報を主な研究資料とした。もちろん、その理解には、分担研究者がこれまで行ってきた関連領域での研究を参考にした。

(倫理面への配慮)

公にされていない特定の個人を対象にしたわけではないので、特に倫理上の配慮に問題が生じることはないと考え。

C 研究結果と考察

1. 社会的問題行動を起こす新たな精神病理とその共通的特徴

分担研究者は昨年度の“特定集団指導者と信奉者との関係についての精神医学的、精神分析学的研究”において次の事柄を明らかにした。

- (1) ある特定集団の指導者の特性
- (2) 信奉者になった人たちの特性
- (3) カルト集団とその信奉者との関係
- (4) 示唆される治療的介入の可能性と方向

これらの論述の中で、入信から信奉者になり、さらに指導者の宗教的イデオロギーと現実社会を敵視し反社会的行為を選ばれた者の証とする誤った判断を取り入れる過程を明らかにした。これら入信・信奉者たちには個人差はあるであろうが、一般に、知的にはすぐれていても、自己愛的傾向が強く現実社会の中で適応がわるく、つまり対人関係が円滑でなく、空虚感、孤独感をおこしやすい人たちである。自己存在感の希薄化に耐えられず自虐的鍛錬、修行を行う特定集団に入り、選ばれた人感覚を起こし特定集団の中のにめりこみ、いつわりの自己をつくりだしたと理解される。

ところが、この数年、少年による殺傷事件が相次いで起きている。いずれも特異で重大な事件であるとともにそれらが何時でも何処でも起きかねないと思われるが故に、社会の人びとは特定カルト集団によるテロ

事件同様、不安になるとともにその成因についての理解に苦しんでいるのである。それら少年たちで精神科医の診断を受けたものはICD-10の行為障害と診断されたものが多い。刑事事件のための精神鑑定結果が新聞などで簡単に報道されたものだけでは詳細な理解はできないが、精神分裂病との近縁性、アスペルガー症候群、解離性障害などの精神障害との関連を示唆されるものがあるとされている。もちろん、ふつうの非行の進行の結果と指摘されているものもある。分担研究者(2001)はこれら最近の少年事件を起こした少年にはそれぞれ個別性があることは当然とし、同時に個別性をこえた共通性も存在することを指摘した。すなわち、(1)未熟性の持ちこし(2)徹底した孤立(3)過去の仲間関係の中での心的外傷、そのための対人接触欲の撤去(4)空想・幻想の中での修復(5)前兆行動と情動の亢ぶり(6)タブー破壊と死の欲動などである。このような少年事件を起こした者たちの共通的特徴を挙げてみると、特定カルト集団信奉者たちと年令のちがいによる差はあるにしても人格像の基盤に共通するところがみられると云うのもあながちこじつけとは云えないだろう。それら共通的特徴について以下に要約しよう。

(1) 暴力行為の前段階としての引きこもり-内に潜んだ攻撃性

少年事件を起こした者たちにみられるのは前に述べたように対人関係からの撤去であり、それが正当か否かは別として、自尊心の傷つきの怒りを内蔵した引きこもりである。特定カルト集団の入信者たちにも入信前の生活態度として日常生活場面での孤立あるいは自己不全感がみられることが指摘されている。また、分担研究(2000)が「一般市民に向かう暴力、殺人事件」について論じた中で、最近の2大通り

魔事件の加害者のいずれもが、“知的にはすぐれ、周囲からは強く期待され本人もそう望みながら、社会的適応性の障害のために、人格内の対立と緊張とがあり、社会的孤立、被害感があったと推定される”と指摘した。

(2) 暴力-外に向けた攻撃性

特定集団によるテロ行為は彼らの誤ったイデオロギーによる集団行為であり、少年事件における殺傷行為や暴力や通り魔事件の殺傷行為のような衝動性コントロール能力の急激な減退による個人的行為とは根本的に異なる。だが、いずれの場合も被害者は、加害者とは一切面識がない人が選ばれる傾向があることでは一致する。つまり、自らの暴力を正当し、攻撃性を外在化するのに、一般社会が敵視されている。それは事件を起こした者たちの内心の自己誇大感を反映したものであり、今日社会の時代思潮を示すものでもある。

(3) 人格発達、ことに思春期心性の歪曲

これまで述べてきたことは、対他ならびに対自の適応が円滑でなく、調和のとれた自己感覚が充分には成長していないことを意味する。つまり、人格発達、ことに思春期の人格発達に重大な問題があることを示すものであろう。Blosの思春期発達モデルによると思春期は仲間との濃密な信頼関係を作ることによって両親からの情緒的離脱と自立をはかる世代である。新たな精神病理を起こした者たちの思春期は、友人からも家族からも距離をおいて人間関係が希薄あるいは不安定であることでは共通するように思われる。

(4) 仲間、あるいは集団との関係の異常

新たな精神病理を持つと思われる者たちの仲間、あるいは集団との関係は表面的には相反する2極的な態度がみられる。それは指導者への帰依のもとでの結束で、家族やそれまでの交友関係を遮断した現実否認

の中でのものである。Bionの基底的想定集団理論の中の依存集団に相当する。他方、少年事件や通り魔事件を起こした者たちは、集団への参入ができず、孤立し、そのために、現実体験も得られず、自己評価が傷つき、怒りと現実吟味能力の障害をもたらしている。ただ、特定カルト集団の信奉者たちも、入信する前までは仲間あるいは集団から孤立していたわけで、入信して集団へ傾斜する機会を得ているのである。Bionの云う依存集団は、ある人物ここでは特定カルト集団指導者に依存することで、あらゆる危険から保護されると想定しているかのように動く集団を意味する。

2. 同一性障害としての理解

新たな精神病理として一括した者たちの人格の障害は同一性障害と理解される。同一性障害は、一般には子どもや青年における自己感覚についての重篤な苦悩があり、性同一性、学校、職業選択、宗教、集団への忠誠心、道徳、人生目標などについて確固とした行動がとれないことを云う。ただしここでは、「いつわりの同一性」も同一性障害に含めることにする。同一性障害は正しい自己感覚に基づいて判断し行動することである。正しい自己感覚とは生活史上の発達感覚と現在の自己像にもとづいて他者とちがった自己像を体験できることである。その前提として他者の人間としての存在を認めることができねばならない。

(1) 自己評価の挫折/心的閉塞感

少年事件を起こした者の多くは、思春期前期の交友関係で疎外されたり、いじめにあったり、あるいはそれらに過度に反応したり、それまでの栄光や万能感が傷つき、その修復もかなわず、自ら孤立し、次第に心的閉塞感に陥っていると考えられる。しかも、解決の展望が開けない状況は彼らの

自己についての現実感覚を損なうことは容易に理解される。通り魔事件の容疑者たちにもそのことはあてはまる。特定カルト集団の信奉者たちはそのような心的閉塞感を逃れる手段として、特定カルト集団に参入し、その中で指導者のイデオロギーと指示とをとり入れて選ばれた人になることによって、いつもの自己をつくりだしていると理解される。

(2) 被害感情

自己のおかれた状況を正しく認知できず、敵意を外在化するという投影性同一視の防衛機制が働き、被害感情に包まれている。特定カルト集団の信奉者は、よい対象と悪い対象と分裂がおこり、指導者の指揮下の集団は理想化され、それに属することでいつもの自己感情の穴ぶりを体験し、他方、社会を見下し、敵視し、それが極端になって攻撃が仕掛けられると誤った判断をするに至る。

(3) 幻想優位のいつもの自己あるいは癒し

特定カルト集団の信奉者たちが、修行の中で体験された、自他の区別をこえた全体感体験、いわゆる大洋感情とそれをもたらしてくれた指導者を神格化し、理想化転移を生じていることは昨年度の分担研究で論じた。それは指導者のもとの特定カルト集団の幻想を取り入れたいつもの自己形成の過程でもある。そのことによって自己評価は守られているのである。少年事件を起こした者たちは、その何人かは、神戸のA少年が使った「酒鬼薔薇」の名と声明文に関心を持ち、中にはそれを暗唱し、教室の黒板に「皆殺す」と書き、腕に「卍」「死ね」とペン先で刻みこむものまでいたという。また、何人かはインターネットで自らの破壊性を誇示していたという。幻想の共有あるいはファッション性がみられる。空想ないしは幻想はA少年のようなサイコ

エデリックなものから、性的空想に至るまでいろいろの段階の内容のちがいはあるが関係性の病理のあらわれとみなせよう。

(4) 実生活体験のとぼしさ

人格の発達、形態的、機能的、心理的そして精神的4領域が平衡を保ってはじめて健康なものになるのである。しかし、今日の青少年の人格発達はこのバランスが必ずしも保たれているとは云いがたい。両親の期待や学校教育の現場が知的優位の指向性をとって体験を通じての情緒満足や行動の達成が十分に得られないというアンバランスを一般傾向として起こしている。これらは年齢相応の内的ニーズに相応した現実生活体験が乏しいことに由来する。その結果、現実感覚や自己感覚が適切なものに発達することを疎外する。その結果、同一性の発達が歪曲されてしまう。

3. わが国社会の変化との関連

(1) わが国社会の近代化過程とそれに関連する精神病理

少年事件の背景にある暴力事件は今日のわが国では、少年や同一性障害の若い成人にばかりにあるのではない。夫による妻への暴力、母親による幼いわが子への虐待、さらには母親同士の軋轢からの幼児殺害など数えあげればきりが無い。犠牲者になるのが、家族、知人、仲間あるいは近縁者など恨みをかいやすい人もいるが、見ず知らずの縁もゆかりもない人びとさえ巻きこまれている。後者ほど自他の区別を失う病的投影性同一視が生じやすく、その意味でより重篤な病理性を帯びていると云えよう。

ところで、わが国はもともと相互依存の文化を制度的に持っていた。そのような文化の極端な病的あらわれとして親子、あるいは一家心中事件があったが今日のような見ず知らずの者たちが、怒りの発散の犠牲にあうということは希有のことであったと

云ってよいであろう。ある個人が心の傷つきや怒りを体験しても、それを吸収してくれる家族制度やそのコピーとしての職場内共同体があった。農業社会の時代には地域の連帯と世間の目とが個人を支えるとともに、個人の勝手を抑止した。町の長屋にしても共同生活を通じての相互扶助と相互学習とがあった。個人の人生目標も家の継承が尊重され比較的明確であった。それまで対人関係の原則は「和の論理」であった。江戸末期、明治、大正、昭和の前半、近代化、つまり西歐化の中で敏感な青年たちは、この「家」と個人の相克に悩んだ。近代文学の歴史の中でも、二葉亭四迷の「浮雲」、森鷗外の「舞姫」、夏目漱石、島崎藤村の名作と云われよく読まれた小説は、近代化自己の発展がしばしば「家」と衝突していることをとりあげたものである。その当時の若者には避けて通れない葛藤であった。森田療法もそうした土壌で生じた神経症の治療法として出発したものと考えられる。森田正馬自身が「家」と個人との深刻な葛藤の体験者であったことは広く知られている。若者は社会や文化の変化に敏感で同一性の形成に困難を体験しその結果、葛藤が解決しないとその葛藤による精神病理が生じるのである。

第2次世界大戦で国は破れた。そして、廃墟とともに古いものは否定され、経済復興から工業化社会になり、都市化、核家族化がわが国を掩った。職住分離がふつうのことになり生活環境は一変し地域共同体は崩壊した。偏差値優位と競争社会に勝ち抜くことと子どもと父親とは駆り立てられ、子育てはもっぱら母親の責任となり押しつけられた。しつけなどという社会生活の基本的訓練をあらわす言葉は死語となった。

やがて社会変化は加速し情報化社会となり一層、商業優位の原則が確立した。そこでは効率や収益が尊ばれ、最小の努力で最

大の効果を得ることが目標とされる。言葉はコマーシャルの道具となり、相互コミュニケーションの道具という役割を失ってきた。そうした社会の変化の節目にその変化に対応するかのように新たな精神病理が発生した。戦後の近代化の中では「家」の崩壊と自己愛への傾斜が見られたのであるが、競争に後れをとる不安から心理社会的モラトリアム、すなわち、未熟性の持ちこしが目立った。今日では、性別、年齢別、職業別、あるいは国籍別といったその人の同一性の基盤をなしてきたものが崩壊しボーダーレスの特徴がみられる。大人の性倫理の変化は思春期の子どもたちの性行動にも影響を与えている。このような状況は、信頼するものの喪失、つまり自己そのものの不安を起こしている。もちろん、そうした中で、ボランティア活動のように他者への奉仕の中に自分を発見する仲間性あるいは社会的自己のめばえが生じる機会にもなっている。特定カルト集団への参入の動機も本来はそのような自己発見・自己実現の目標と関わっているのであろうが特定カルト集団の非・反社会性を見抜けなかったところに悲劇が生じる要因があった。わが国の特定カルト集団のテロ事件を考察したL i f t o n (1 9 9 9) はこの特定カルト集団の発展と一連の事件の背景に日本の戦後のナショナル・アイデンティティの喪失があることをあげているが示唆にとむ見解である。

(2) わが国の伝統的コミュニティの崩壊と子育ての変化—人格発達への影響

わが国の伝統的社会あるいはコミュニティは、相互扶助の原則として個人を支持するとともに、世間として個人の心を大きく規制した。「ムラ」や長屋を考えれば容易に理解される。それは、一方では「個」の確立を不必要あるいは困難にした。子育てもこれら「ムラ」あるいは長屋共同体の中

で行われた。柳田国男の研究によると、わが国の子どもの遊びでは、家の内での親との口遊び（子守歌）手遊び（玩具）から縁側・軒下の遊び、辻の遊び、広場の遊びと広がり、その中で、・年上の子は年下の子の面倒を見、・年下の子は年上の子にはやく追いつこうとし、・子ども自身の思いつきや言葉が尊重され、・親や大人の流儀や行動が模倣されるなどの特徴があると述べている。このような伝統的なコミュニティの子どもの遊びの中で、子ども集団への参加、子ども集団内の自主性、ルールづくりの能力が育つとも指摘している。今日、わが国の伝統的コミュニティの崩壊とともにとくに都会ではこのような子どもの遊びは消失している。かわって、保育園や幼稚園では保育の管理のもとでのプログラム化された遊びとなっている。これらの変化は子どもの人格発達にも影響を及ぼしているであろう。

（3）コミュニケーション障害

現代は「聞き下手」の世紀という指摘がある。ラジオ、TVを受け身的に聞くだけで相互性がない。しみじみとじっくり聞いて理解し考え、自分の意見を伝えるという受信、理解、判断、送信の過程が短縮し、結論のみが強調される。携帯電話やインターネットによるコミュニケーションがどのような役割を果たすか今のところ判断しにくいのが道具に支配されたコミュニケーションの域を出ないのではなからうか。

4. 新たな精神病理に対する予防と治療的対応についての精神医学的ならびに精神分析的立場からの対応

これまで論じてきた新たな精神病理は個人の病理にとどまらず、社会病理現象とも理解される多重層的原因を内蔵したものである。したがって、その解決は一側面のみからの対応で可能とは考えられない。精神

病理現象という理解することが精神医学的対応のみで解決するという誤解を生じることのないよう心掛けるべきである。そのような視点に立って精神医学的あるいは精神分析的対応の可能性を見出すとしたら次のごとくであろう。

（1）個人療法あるいはアプローチに加えて集団療法の体験を用意すること

特定カルト集団からの信奉者たちは、いったんは依存集団での満足を体験している。カルト集団から離脱しても、個としての存在に耐え得ない特徴を身につけていると云えよう。集団には個人を収納ないしは包み込む機能とともに集団から排除する機能も持っている。単なる集団活動は動機を同じくする者たちの志気を高めることにはなるが、決して人格の安定と望ましい変化をもたらすことにはならないであろう。練達の専門家の関与したもとでの閉ざされた集団（参加者の決まった集団）での集団療法が必要であろう。そこで、他メンバーから受容され支持されるとともに頼りにされる体験をすることが自己評価の改善とただしい自己感覚を体得することになる。少年事件を起こした者たちの集団プログラムへの導入はより慎重であらねばならないが集団体験なしには人格の改善と成長は得がたいであろう。個人療法で安心と信頼を獲得するとともに、まずは集団活動、そして自己感覚の改善とともに集団療法へ導入することが期待される。

（2）精神医学的対応

中には、精神分裂病、気分障害などの近縁性、あるいはPTSD、解離性障害などの関連性が考えられる場合がある。それらには的確な診断のもとでの薬物療法などの精神医学的対応が求められる。

（3）SSTのすすめ

コミュニケーション障害の改善には現在、わが国で普及しつつあるSSTは有用であ

ろう。

(4) 健康教育

睡眠の短縮化は子どもの内分泌機能の発育に阻害的に働くことは明らかにされている。また、個食の習慣の子どもに衝動性コントロール能力の障害のあることも指摘されている。ライフスタイルの点検と改善とは不可欠のことであろう。

文献

- 1) Lifton, R. J.; Destroying the World to Save it, Metropolitan Books, New York, 1999
- 2) 西園昌久；暴力、その個人病理と社会

病理、日精協誌、19(3)

160-164, 2000

- 3) 西園昌久；特定集団指導者と信奉者の関係についての精神医学的精神分析学的研究、吉川武彦（主任）特定集団から離れたものに対する保健指導のありかたに関する研究、平成11年度厚生科学特別研究報告書、7-13, 2000
- 4) 西園昌久；最近の少年事件を考える、5, わが国社会の近代化の矛盾、精神療法、27(2)2-6, 2001

厚生科学研究費補助金（特別研究事業）
分担研究報告書

社会的問題行動を起こす新たな精神病理に関する研究

分担研究者 中島 豊爾 岡山県立岡山病院院長

研究要旨 この数年、特に1997年の「神戸の少年Aによる殺人事件」以降、少年による特異で、動機が分かりにくい犯罪が続いている。公表されている資料と、一部は関係者からの聴取により、事件の背景にある少年の状態について検討した。その結果、いくつかの事件の少年は、高機能広汎性発達障害であることが無視できない要因であると推測された。周囲の人も、精神科医でさえ適切な対応ができていない状況である。発達の視点を十分に持った精神科医の育成が急がれるところである。

A. 研究目的

この数年来、少年による特異な犯罪が頻発している。とくに「神戸のA少年」による猟奇的で残忍な事件は、世間を震撼させた。このような事件は、単発的であることが多いがなぜ次々に起きるのか、それらの事件の背景にある精神病理の一部でも明らかにして、今後の対策の一助とすることが本研究の目的である。

B. 研究方法

この数年間におきた、とりわけ特異であって、その動機において従来の犯罪学の理解を超えた少年事件について、報道などで公表されている資料を基に検討した。精神鑑定の結果が一部報道されたものについては特に重視した。

また一部の事件については、事件関係者への接触を試みた。これは新聞報道等と事件現場の実感との違いを知っておく必要があったからである。

研究協力者の選任に当たっては、特定の

団体の意見に偏らないように、以下の十の精神科専門団体からの推薦を受けた。すなわち、日本精神神経学会を中心に、精神医学講座担当者会議、日本児童青年精神医学会、日本総合病院精神医学会、日本精神科救急学会、日本思春期青年期精神医学会、日本精神病院協会、日本精神神経科診療所協会、全国自治体病院協議会精神病院特別部会、国立精神療養所院長協議会である。
(倫理面への配慮)

個別事例については、少年による事件であることに配慮して、この報告書では言及しない。また今後、民事訴訟の予測される事例もあるため、事件が特定されるおそれのある記述は、既に公表されているものをのぞいて、避けることとした。すなわち倫理上の配慮により、この報告書はごく一般論としての形式を取らざるを得ないので、根拠となった文献類を明示できないことをお断りしておく。

また事件関係者への接触においては、十分な調査趣旨の説明を行い、文書による同

意を得た。

C. 研究結果

少年が社会的問題行動、とりわけ重大な犯罪行為に至るのは、特定の一つだけの原因によるわけではない。少年自身の遺伝的素因と、胎児期を含めた外界環境との相互作用の結果として生起するものであることは論を待たない。環境要因としては、家族のあり方の変化や、学校における教師と生徒、生徒同士の関係の変化が指摘されて久しい。また最近では、インターネットの普及による仮想世界と現実世界との境界の不鮮明化も問題となってきた。

一方、「最近の少年による特異・凶悪事件の前兆等に関する緊急調査報告書」（警察庁生活安全局少年課・科学警察研究所防犯少年部、平成12年12月21日）では、平成10年1月から12年5月までの特異・凶悪事件22件（25人）を調査している。この中で、事件前に検挙歴や補導歴があったのは8人で、残る17人にはそれがなかったとしている。つまり、特異な事件を起こした少年たちは、従来型の非行からの延長線上で事件を起こしたものよりも、報告書に言う「いきなり型」が多かったということである。

この「いきなり型」の背景にある少年たちの精神病理こそ、本研究の対象であろう。しかし今少し詳しく見ると「いきなり型」のなかにも、既に言い尽くされた感のある、思春期になって挫折した少年たちが含まれている。このような体験は、どのタイプの少年にも起こりうることであるが、発達上の偏りや脆弱性を有する少年には、とりわけ起こりやすい点に留意しなければならない。

さらに、警察庁の緊急調査報告書には入っていない、岡山の高校野球部員によるバット殺人事件や大分の一家6人殺傷事件も

含めて考える必要がある。

精神鑑定では、しばしば行為障害との診断を目にするが、これでは少年についての十分な診断とは言い難い。行為障害に至る病理の説明が欠けているからである。勿論、新聞報道等の限られた情報から鑑定書の是非を言うつもりはない。いずれにしても、少年の特異で、動機において容易に納得しがたい犯行の精神病理を伺い知るためには、発達歴・生育歴などの検討を発達の視点から十分に行うことが不可欠である。

そこで、問題となる事件について発達の観点から、可能な範囲で検討してみた。その結果、事件との関連が推測されるのは、発達障害のなかでも、高機能広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害、軽度ないしは境界域の知的障害などの、いわゆる軽度発達障害であった。

愛知県豊川市の主婦殺害事件の17歳少年については、再鑑定の診断であったアスペルガー症候群が採用され、ようやくこの種の事件の理解に発達の観点が重要であるとの、公の認識が示された。この少年の供述として報道された「人を殺す経験をしてみたかった」という言葉は、高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群を含む）を想起させるに足るものであったともいえよう。

同様の観点から他の少年事件を見直してみれば、類似の問題が関与していたと思われる事件は少なくない。たとえば、視点の切り替えが困難で、一度決めたことはいかに社会的に不適切であろうと徹底してやり通す、というのは高機能広汎性発達障害の特徴の一つであるし、また極度のストレス状況下ではパニックとなり、短絡的に平素の文脈からはずれた行動をとりやすいこともよく知られている。愛知・豊川の事件以前の審判の中にも、診断は正しくついても、少年の将来や同じ診断を受けている